

ミサがわかるセミナー 2026～2027シリーズ  
 《年間テーマ》  
**神とともに歩む教会～～ともにささげるミサ**

第1回 「感謝の祭儀」の成り立ち

2026年5月17日(日)

担当 石井祥裕

今期のシリーズでは、「ともに歩む」という意味のシノドスの心をもって、感謝の祭儀(ミサ)について学んでいきます。典<sup>レ</sup>礼は、神の民であるわたしたちがともに奉仕し合<sup>て</sup>て神にささげるものですが、その源をなすのは、神がわたしたちとともにおられ、ともに歩んでくださっているという救いの歴史の事実です。それを体現なさっているのがまさしくキリストです。

第1回として今回は、聖書をもとに、旧約の神の民の祈りがキリスト教の典<sup>レ</sup>礼の祈りの範型となっていること、それがキリストによって統合されて高められ、使徒たちの祈りの実践となっていたこと、教会の初期の歩みの中で、今の典<sup>レ</sup>礼のおおもとが形成されていった様子を眺めていきます。いつくしみ深い神の恵みのわざをいつも心にとめて賛美と感謝をささげ、希望をこめて祈る感謝の祭儀の成り立ちを見つめていきましょう。

0. 「感謝の祭儀」の成り立ちは、ミサの奉献文の中でいつも示されています！

第二奉献文 (太字はどの 奉献文も同じ)	主イエスはすすんで受難に向かう前に、 <u>パンを取り、感謝をささげ、裂いて、弟子に与えて仰せになりました。「皆、これを取って食べなさい。これはあなたがたのために渡されるわたしのからだ(である)。」</u> 食事の後に同じように杯を取り、 <u>感謝をささげ、弟子に与えて仰せになりました。「皆、これを受けて飲みなさい。これはわたしの血の杯、あなたがたと多くの人のために流されて罪のゆるしとなる新しい永遠の契約の血(である)。</u> <u>これをわたしの記念として行いなさい。」</u>
第三奉献文 (太字はどの 奉献文も同じ)	主イエスは渡される夜、 <u>パンを取り、あなたに賛美と感謝をささげ、裂いて、弟子に与えて仰せになりました。「皆、これを取って食べなさい。これはあなたがたのために渡されるわたしのからだ(である)。」</u> 食事の後に同じように杯を取り、 <u>あなたに賛美と感謝をささげ、弟子に与えて仰せになりました。「皆、これを受けて飲みなさい。これはわたしの血の杯、あなたがたと多くの人のために流されて罪のゆるしとなる新しい永遠の契約の血(である)。</u> <u>これをわたしの記念として行いなさい。」</u>

しかし、このすべてに旧約聖書、新約聖書の背景があります

(※聖書は新共同訳、太線、下線は講師)

1. 旧約の民の救いの体験と預言

\*エジプト脱出(解放・あがない)の根本体験

＝過越祭と除酵祭の源となった主のわざと祭の定め

出エジプト記12・1-18

エジプトの国で、主はモーセとアロンに言われた。2「この月をあなたたちの正月とし、年の初めの月としなさい。3イスラエルの共同体全体に次のように告げなさい。『今月の十日、人はそれぞれ父の家ごとに、すなわち家族ごとに小羊を一匹用意しなければならない。…6それは、この月の十四日まで取り分けておき、イスラエルの共同体の会衆が皆で夕暮れにそれを屠り、7その血を取って、小羊を食べる家の入り口の二本の柱と鴨居に塗る。8そしてその夜、肉を火で焼いて食べる。また、酵母を入れないパンを苦菜を添えて食べる。…11それを食べるときは、腰帯を締め、靴を履き、杖を手にし、急いで食べる。これが主の過越である。12その夜、わたしはエジプトの国を巡り、人であれ、家畜であれ、エジプトの国のすべての初子を撃つ。また、エジプトのすべての神々に裁きを行う。わたしは主である。13あなたたちのいる家に塗った血は、あなたたちのしるしとなる。血を見たならば、わたしはあなたたちを過ぎ越す。わたしがエジプトの国を撃つとき、滅ぼ

す者の災いはあなたたちに及ばない。14この日は、あなたたちにとって記念すべき日となる。あなたたちは、この日を主の祭りとして祝い、代々にわたって守るべき不変の定めとして祝わねばならない。15七日の間、あなたたちは酵母を入れないパンを食べる。まず、祭りの最初の日に家から酵母を取り除く。…16最初の日に聖なる集会を開き、第七日にも聖なる集会を開かねばならない。この両日にはいかなる仕事もしてはならない。…17あなたたちは除酵祭を守らねばならない。なぜなら、まさにこの日に、わたしはあなたたちの部隊をエジプトの国から導き出したからである。それゆえ、この日を代々にわたって守るべき不変の定めとして守らねばならない。

#### \*神の民としての形成(出エジプト19・3-6)

モーセが神のもとに登って行くと、山から主は彼に語りかけて言われた。「ヤコブの家にこのように語り、イスラエルの人々に告げなさい。4あなたたちは見たわたしがエジプト人にしたことまた、あなたたちを鷲の翼に乗せてわたしのもとに連れて来たことを。5今、もしわたしの声に従い、わたしの契約を守るならば、あなたたちはすべての民の間において、わたしの宝となる。世界はすべてわたしのものである。6あなたたちは、わたしにとって、祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である。」

#### \*シナイ契約の締結

##### 出エジプト記24・1-12

1主はモーセに言われた。「あなたは、アロン、ナダブ、アビフ、およびイスラエルの七十人の長老と一緒に主のもとに登りなさい。あなたたちは遠く離れて、ひれ伏さねばならない。2しかし、モーセだけは主に近づくことができる。その他の者は近づいてはならない。民は彼と共に登ることはできない。」3モーセは戻って、主のすべての言葉とすべての法を民に読み聞かせると、民は皆、声を一つにして答え、「わたしたちは、主が語られた言葉をすべて行います」と言った。4モーセは主の言葉をすべて書き記し、朝早く起きて、山のふもとに祭壇を築き、十二の石の柱をイスラエルの十二部族のために建てた。5彼はイスラエルの人々の若者を遣わし、焼き尽くす献げ物をささげさせ、更に和解の献げ物として主に雄牛をささげさせた。6モーセは血の半分を取って鉢に入れて、残りの半分を祭壇に振りかけると、7契約の書を取り、民に読んで聞かせた。彼らが、「わたしたちは主が語られたことをすべて行い、守ります」と言うと、8モーセは血を取り、民に振りかけて言った。「見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である。」

#### \*新しい契約・永遠の契約の予告

##### イザヤ55・3-5

3 耳を傾けて聞き、わたしのもとに来るがよい。聞き従って、魂に命を得よ。わたしはあなたたちととしえの契約を結ぶ。ダビデに約束した真実の慈しみのゆえに。4見よ、かつてわたしは彼を立てて諸国民への証人とし、諸国民の指導者、統治者とした。5今、あなたは知らなかった国に呼びかける。あなたを知らなかった国はあなたのもとに馳せ参じるであろう。あなたの神である主、あなたに輝きを与えられるイスラエルの聖なる神のゆえに。

##### エレミヤ31・31-33

31見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。32この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。33しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

##### エゼキエル37・23-27

23彼らは二度と彼らの偶像や憎むべきもの、もろもろの背きによって汚されることはない。わたしは、彼らが過ちを犯したすべての背信から彼らを救い清める。そして、彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。24わたしの僕ダビデは彼らの王となり、一人の牧者が彼らすべての牧者となる。彼らはわたしの裁きに従って歩み、わたしの掟を守り行ふ。25彼らはわたしがわが僕ヤコブに与えた土地に住む。そこはお前たちの先祖が住んだ土地である。彼らも、その子らも、孫たちも、皆、永遠に至るまでそこに住む。そして、わが僕ダビデが永遠に彼らの支配者となる。26わたしは彼らと平和の契約を結ぶ。それは彼らとの永遠の契約となる。わたしは彼らの住居を定め、彼らを増し加える。わたしはまた、永遠に彼らの真ん中にわたしの聖所を置く。27わたしの住まいは彼らと共にあり、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

\*民の罪を背負って、自らを償いの献げ物とする主の僕

イザヤ53・6-12

わたしたちは羊の群れ、道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて主は彼に負わせられた。7苦役を課せられて、かがみ込み、彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように毛を刈る者の前に物を言わない羊のように、彼は口を開かなかった。8捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。…10病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ、彼は自らを償いの献げ物とした。…11わたしの僕は、多くの人々が正しい者とされるために、彼らの罪を自ら負った。12それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし、彼は戦利品としておびたしい人を受け。彼が自らをなげうち、死んで、罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人々の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人であった。

## 2. 旧約の民の礼拝: 賛美と感謝と記念の営み

### 賛美

- a) ヘブライ語「ベラカー」(祝福と賛美の両面を意味する単語)  
詩 28:6「主をたたえよ……」 Blessed be the Lord! for …(詩 31:22; 66:20 など)  
神のわざが先にあり、それに気づいて、神をたたえる  
⇒ イエスの時代、ユダヤ教の礼拝を象徴することとなる  
⇒ 家々での神賛美の会食儀礼=ベラカーの食事

#### 新約聖書ギリシア語、教会用語での受容

ギリシア語「エウロギア」(祝福/動詞)「エウロゲオー」(祝福する/賛美する)

\*イエスの食事の祈りにも

供食のとき「パンと魚を取り)天を仰いで賛美の祈りを唱え」(マル 6:41; マタイ 14:19; 路 9:16)  
最後の晩餐のとき「パンを取り、賛美の祈りを唱えて」(マル 14:22; マタイ 26:26; 路 24:30)

- b) ヘブライ語「テヒラー」(端的な賛美)  
詩 22:24「主を賛美せよ、…… 主に栄光を帰せよ」など詩編に頻出  
「詩編」→原語「テヒリーム」=賛美歌集  
ポイント ⇒短い 賛美句「ハレルヤ」=原義「主をたたえよ！」  
(詩 104-106; 111-13; 115-117; 119; 135; 146-150 など参照)

### 感謝

ヘブライ語「トーダー」

感謝=感謝の献げ物 詩 56:13「神よ、あなたに誓ったとおり、感謝の献げ物をささげます」  
「告白」としての感謝 詩 50:14「告白を神へのいけにえとしてささげ」(50:23も)

#### 新約聖書ギリシア語・教会用語では

ヘブライ語の名詞トーダーはギリシア語の名詞「エウカリスティア」、動詞「エウカリステオー」

\*イエスの食事の祈りにも

供食のとき「パンを取り、感謝の祈りを唱えてこれを裂き」(マル 8:6; マタイ 15:6; コリネ 6:11)  
最後の晩餐のとき「パンを取り、感謝の祈りを唱えて」(路 22:19; 1 コリント 11:23)  
「杯を取り、感謝の祈りを唱えて」(マル 14:23; マタイ 26:27; 路 22:17)

### 記念

- a) 心に留めるのは「契約」  
1) 神が契約に心を留める  
創 9:15,16「わたしは、わたしとあなたたち……との間に立てた契約に心を留める」  
詩 105:8「主はとこしえに契約を御心に留められる」  
2) 人が契約に心を留める  
詩 103:18「主の慈しみは、主の契約を守る人、命令を心に留めて行う人に及ぶ」  
b) 神への嘆願の代表的なこと  
詩 25:7「主よ、わたしを御心に留めてください」  
詩 115:12「主よ、わたしたちを御心に留め、祝福してください」 etc  
c) 人が神の御業を心に留める/記念する  
詩 105:5「主の成し遂げられた驚くべき御業と奇跡を……心に留めよ」  
詩 111:4「主は驚くべき御業を記念するよう定められた」

新約聖書ギリシア語・教会用語では

ヘブライ語ジッカロンは「アナムネーシス」(名詞)

最後の晩餐: 「わたしの記念としてこのように行いなさい」(ルカ 22:19; 1 コリト 11:24-25 参照)

祈りにおいて「心に留めてください」「顧みてください」などで展開

### 3. 神賛美の会食儀礼(ユダヤ教の家々での礼拝行為)

#### イエス～使徒時代の概要

- a) 前菜, 第1の杯の祝福: 食事の初めの前菜と最初の杯。  
その日(過越・安息日・他の祝日) に関する短い賛美を唱える  
(ベラカーの賛美=「主よ、あなたがほめたたえられますように」など)
- b) 中心の食事、第2の杯: 過越祭の食事では過越伝承を語る。  
ハレル詩編の前半(Ps113-114) を歌い、救いへの感謝をささげ、ぶどう酒を飲む。  
主人はパンを取り、a)と同様の賛美を唱える。
- c) 第3の杯と食後の祈り(同様の賛美、感謝、嘆願と展開し、最後に賛美)
- d) 結び: 第4の杯の杯: ハレル詩編 114, または 115-118, 詩編 136, 賛歌を歌う

### 4. 最後の晩餐におけるイエスの行為と定め

一コリント11:23-26	<p>23 わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、24 感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。</p> <p>25 また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。26 だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。</p>
ルカ22:14-20	<p>14 時刻になったので、イエスは食事の席に着かれたが、使徒たちも一緒だった。15 イエスは言われた。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。16 言うておくが、神の国で過越が成し遂げられるまで、わたしは決してこの過越の食事をとることはない。」</p> <p>17 そして、イエスは杯を取り上げ、感謝の祈りを唱えてから、言われた。「これを取り、互いに回して飲みなさい。18 言うておくが、神の国が来るまで、わたしは今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」</p> <p>19 それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」</p> <p>20 食事を終えてから、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。」</p>
マルコ 14・22-26	<p>22 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えてそれを裂き、弟子たちに与えながら言われた。「取りなさい。これはわたしの体である。」</p> <p>23 また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて彼らにお渡しになった。彼らは皆その杯から飲んだ。24 そして、イエスは言われた。「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である 25. はっきり言うておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。」</p> <p>26 一同は賛美の歌を歌ってから、オリーブ山へ出かけた。</p>
マタイ26・26-30	<p>26 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えてそれを裂き、弟子たちに与えながら言われた。「取って食べなさい。これはわたしの体である。」</p> <p>27 また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて彼らに渡して言われた。「皆、この杯から飲みなさい。28 これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。 29 言うておくが、わたしの父の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。」</p> <p>30 一同は賛美の歌を歌ってから、オリーブ山へ出かけた。</p>

旧約の背景の上に 自らが贖いの献げ物、新しい契約の献げ物であること  
パンとぶどう酒が その自分自身としてささげられ、分け与えられることを明示  
それを 終末における再臨(神の国の完成)まで 地上で神の民が行うべきものとした

記念命令の意味

- ⇒記念されること:主イエスの死(と復活)=民・人類の罪からの贖い=新しい契約の締結
- ⇒記念する主体: 人(弟子たち、キリスト者たち、人類)と神と両方

参考)ヘブライ書の説き明かし

イエスは自ら祭司として自分自身を一回限りの贖いの献げ物、新しい契約の献げ物とした

(ヘブライ9・11-28)

キリストは、既に実現している恵みの大祭司としておいでになったのですから、人間の手で造られたのではない、すなわち、この世のものではない、更に大きく、更に完全な幕屋を通り、12 雄山羊と若い雄牛の血によらないで、御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです。…15 こういうわけで、キリストは新しい契約の仲介者なのです。それは、最初の契約の下で犯された罪の贖いとして、キリストが死んでくださったので、召された者たちが、既に約束されている永遠の財産を受け継ぐためにほかなりません。… 24 なぜならキリストは、まことのものの写しにすぎない、人間の手で造られた聖所にではなく、天そのものに入り、今やわたしたちのために神の御前に現れてくださったからです。…26世の終わりにただ一度、御自身をいけにえとして献げて罪を取り去るために、現れてくださいました。27 また、人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっているように、28 キリストも、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです。

## 5. 新約聖書における主を記念する食事についての教えと実践

### (1)パウロにおける「主の晩餐」

(一コリント 10:14-22)

16 わたしたちが神を賛美する賛美(エウロギア)の杯は、キリストの血にあずかること(コイノーニア)ではないか。わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかること(コイノーニア)ではないか。17 パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです。

(一コリント 11:17-28)

18 まず第一に、あなたがたが教会で集まる際、お互いの間に仲間割れがあると聞いています。……20 それでは、一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにならないのです。……27 従って、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになります。28 だれでも、自分をよく確かめたうえで、そのパンを食べ、その杯から飲むべきです。

### (2)使徒言行録における「パンを裂くこと」

(使徒言行録2・41-42、46-47)「41 ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。42 彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。

46 そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、47 神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。

### (3)ヨハネ福音書6章にみられる教え

(ヨハネ6・53-58) 53 イエスは言われた。「はっきり言っておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。55 わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。57 生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。58 これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」

#### (4)新約の神の民となっていること 一ペトロ書の教え

(一ペトロ2・4-10)この主のもとに来なさい。主は、人々からは見捨てられたのですが、神にとっては選ばれた、尊い、生きた石なのです。5 あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。…9 あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。10 あなたがたは、「かつては神の民ではなかったが、今は神の民であり、憐れみを受けなかったが、今は憐れみを受けている」のです。

#### 6. 使徒時代の礼拝集会における「ことば」

##### (1)使徒の教え:キリストのことを告げ知らせる、キリストと結ばれるために教える

「世の初めから代々にわたって隠されていた、秘められた計画(ミステーション)が、今や神の聖なる者たちに明らかにされたのです。……その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です。このキリストを、わたしたちは宣べ伝えており、すべての人がキリストに結ばれて完全な者となるように、知恵を尽くしてすべての人を諭し、教えています」(コロサイ 1:26-28)

⇒ 使徒の手紙を読むこと(一テサロニケ 5:27; コロサイ 4:16) ⇒新約聖書、キリスト教の「聖書」の形成

##### (2)歌で満ちていた礼拝集会

一コリント 14: 26「あなたがたは集まったとき、それぞれ詩編の歌をうたい、教え、啓示を語り」  
エフェソ 5:19-20「霊に満たされ、詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。……」(cf.コロサイ 3:16-17)

キリスト賛歌の反映 =「新約聖書の歌」として聖務日課(教会の祈り)の要素

(エフェソ 1:3-10; フィリピ 2:6-11; コロサイ 1:1-20; 一テモテ 3:16; 一ペトロ 2:21b-24; 黙示録 4: 11; 5: 9,10,12; 11:17-18; 12: 10b-12a; 15; 3-4; 19:1-7)

##### (3) 栄唱(栄光を神に帰する短い定型句)の成長と定着

「わたしたちの神であり父である方に世々限りなく栄光がありますように」ガラテヤ 1:5  
「栄光が世々限りなくありますように」=ローマ 16:27; エフェソ 3:21; フィリピ 4:20;一テモテ 1:17;  
二テモテ 4:18;一ペトロ 4:11「栄光と力が」; 5:11「力が」; 黙示録 1:6「栄光と力が」;  
5:13「賛美、誉れ、栄光、そして権力が」; 7:12「賛美、栄光、知恵、感謝、誉れ、力、威力が」  
ほかに ローマ 11:36「栄光が神に永遠にありますように」、ユダ 25 参照

##### (4) 「アーメン」: ローマ 16:27; ガラテヤ 1:5; フィリピ 4:20; ユダ 25; 黙示録 5:13; 7:12

語源は「エメト」(真理・真実・まこと)⇒意味は「まことに、本当に、確かに」

イエスの告げる「アーメン」:新共同訳「はっきりあなたがたに言うておく」(マタイ6・2他多数)  
礼拝集会の会衆による、祈り・信仰宣言への同意・確証を示す。音「アアメン」歌が伝える響き

##### (5) 挨拶句

\*背景)神の民の間での互いの挨拶の形式:ルツ記 2 章 4 節(ボアズと農夫のあいさつ)

「主があなたたちと共におられますように」⇔「主があなたを祝福して下さいますように」  
根底「神がともにある民」「祝福された民」「契約を与えられた民」であること

\*パウロの手紙の挨拶句

「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように」

(ローマ 1:7; 一コリント 1:3; ニコリント 1:2; ガラテヤ 1:3; エフェソ 1:2; フィリピ 1:2 等)

「主イエスの恵みが、あなたがたと共にあるように」(一コリント 16:23)

「わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように」(ガラテヤ 6:18)

「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように」

(ニコリント 13:13)

「主があなたの霊と共にいてくださるように。恵みがあなたがたと共にあるように」

(二テモテ 4:22)

## 7. 2世紀の教父にみる典礼の発展:「キリスト教らしさ」の自覚

### (1) 『十二使徒の教え』(ディダケー)におけるバプティスマとエウカリスティア

全 16 章(シリア・パレスチナ背景 100 年前後~150 年頃?)

【内容】1~6 章:信仰への導き 7~10 章:典礼・祈りについて 11~16 章:実践的留意事項

#### \* 奉献文(エウカリスティアの祈り)の生成

9章) 9 エウカリスティアについては、次のように感謝の祈りを捧げなさい。

初めに杯について。「私たちの父よ。あなたの僕[子]ダビドの聖なる葡萄の木についてあなたに感謝します。

それはあなたがあなたの僕[子]イエスを通して私たちに知らせたものです。栄光はあなたに永遠にありますように。」

裂かれたパンについて。「私たちの父よ。あなたがあなたの僕[子]イエスを通して私たちに 知らせて下さった生命と知識について、あなたに感謝します。栄光はあなたに永遠にありますように。山々の上に散らされていたこれらのパンが集められて一つにされたように、あなたの教会が地の果てからあなたの御国へと集められますように。

栄光と力はイエス・キリストによって永遠にあなたのものだからです。」

主の名において受洗した者以外には誰も、あなたがたのエウカリスティアから食べたり飲んだりしてはならない。

10 章 満ち足りた後に(=満腹した後に)、次のように感謝の祈りを捧げなさい。

「聖なる父よ。あなたが私たちの心の内に住ませて下さったあなたの聖なる名について、またあなたがあなたの僕[子]イエスを通して私たちに知らせた下さった知識と信仰と不死についてあなたに感謝します。

すべてを支配される主よ。あなたはあなたの御名のゆえに万物を創造されました。あなたは人間に食物を与えて楽しませて下さいました。それは、人間があなたに感謝して祈るためです。しかし、私たちにはあなたの僕[子]を通して霊的な食物と飲み物そして永遠の生命を賜りました。

あなたは力ある方ですので、何よりもまず、あなたに感謝の祈りを捧げます。栄光はあなたに永遠にありますように。

主よ、すべての悪から救い、あなたの愛において完全にするために、あなたの教会を顧みて下さい。そして教会を聖別して、四方から、あなたが準備なさった御国へと導き集めて下さい。力と栄光は永遠にあなたのものだからです。恵みが来ますように。この世が過ぎ去りますように。ダビドの神にホザナ(マ 21:9)。もし聖なる者であるならば来なさい。聖なる者でなければ悔い改めるように。マラナタ (cf.1 ヲ 16:22)。アーメン。」

預言者には彼らが望む限り感謝の祈りを捧げることを許しなさい。

14 章 主の日ごとに、あなたがたは集まり、あなたがたの生贖が純粋になるように、前もってあなたがたの、パ罪を告白したうでんを裂き、感謝の祈りを捧げなさい。友人と争っている者は皆、仲直りするまではあなたがたに加えてはならない。あなたがたの生贖が汚れないためである。

### (2) ユスティノスにおける「バプティスマ」と「エウカリスティア」

“護教家教父”・殉教者・キリスト教哲学者 (100 頃-165 頃)

パレスチナ、サマリア地方のフラウア・ネアポリスでギリシア人植民者の家系に生まれる。哲学遍歴をし、プラトン主義を経て、キリスト教こそ唯一の哲学と回心。132 年までに受洗。巡回教師として活動。150 年頃までローマに来て哲学学校を創設。165 年頃、マルクス・アウレリウス帝治下 神々への犠牲や皇帝の勅令遵守を拒否して殉教。「キリスト教哲学」の始祖とされる。その皇帝に宛てた、キリスト教の真理性の弁証の書=『第一弁明』が典礼についても述べている。

#### 65 章(洗礼式後の感謝の典礼)

さて私共は、信仰を抱きかつ教えに同意した者に上述の仕方では洗礼を授けてから、この人を「兄弟」と呼ばれる者たちの所に連れて行きます。その目的は、ここに共に集って、自分共と、照明にあずかったその人と、また全地に居るすべての人々のために、公同の熱い祈りをささげることです。それは私共真理を学んだ者が、行いを通じても模範市民の生活を送っており、命令を遵守していると認められるだけの評価を得るためであり、また永遠の救いを受けるためなのです。

祈り終わると、私共は互いに平和の接吻を交わします。

それが済むと兄弟たちの指導者のもとに、パンおよび水と混酒を注ぐ杯を運びます。それを彼は手に取り、子と聖霊との名によって万有の父に頌栄をささげ、父がこれにふさわしい者としてくださったことに対し、長い感謝をします。彼が祈りと感謝を終えると、臨席する全会衆はアーメンと言って同意を表します。アーメンとはヘブライ語で、「そのようにあれ」ということを意味します。さて指導者の感謝と全会衆の同意があった後、私共の間で執事と呼ばれる者たちが、臨席者の一人一人に、感謝したパンとぶどう酒と水にあずからせるのです。また、欠席者のために持ち去ることもなっています。

#### 66 章(エウカリスティアの意味とその制定)

この食物は私共の間で「エウカリスティア」と呼ばれ、これにあずかることのできるのは、私共の教えを真理と信じ、罪の赦しと新生のための洗礼を受け、キリストが伝えた通りに生活する者に限られます。それ以外は誰もあずかることができません。なぜなら私共はこれらの品を、普通のパンや普通の飲物のように受けているのではないからです。神の言葉によって受肉した救い主イエス・キリストが肉と血を受けたのは、私共の救いのためであったという、このことに対応して、キリストから伝え受けた祈りの言葉で感謝した食物も、私共の受けた教えによれば、あの受肉したイエスの肉と血であり、私共の血肉はその同化によって養われるのです。

すなわち使徒たちはその手になる「福音」と呼ばれる回想録の中で、自分たちは次の命令を受けていると伝えました。-

イエスはパンを取り、感謝して言われた。「わたしを記念するため、このように行いなさい、これはわたしのからだである。」同じく杯も取り、感謝して言われた。「これはわたしの血である」。そして、これらの品を使徒たちだけに分け与えられた、と。

#### 67章(日曜日の礼拝集会)

太陽の日と呼ぶ日には、町ごと村ごとの住民すべてが一つ所に集い、使徒たちの回想録か預言者の書物が時間のゆるす限り朗読されます。朗読者がそれを終えると、指導者が、これらの善き教えにならうべく警告と勧めの言葉を語るのです。それから私共は一同起立し、祈りをささげます。そしてこの祈りが済むと前述のように、パンとぶどう酒と水とが運ばれ、指導者は同じく力の限り祈りと感謝をささげるのです。これに対し、全会衆はアーメンと言って唱和し、一人一人が感謝された食物の分配を受け、これにあずかります。また欠席者には、執事の手で届けられるのです。

次に、生活にゆとりがあっても志ある者は、それぞれが善しとする基準に従って定めたものを施します。こうして集まった金品は指導者のもとに保管され、指導者は自分で孤児ややもめ、病氣その他の理由で困っている人々、獄中につながれている人々、異郷の生活にある外国人のために扶助します。要するに彼はすべて窮乏している者の世話をします。

◎2世紀に「感謝」(エウカリスティア)はキリスト者の典礼を代表することばとなっている  
そして「エウカリスティア」の多様な意味が展開されて示されている

- \*キリストによって命じられたキリストを記念する晚餐型典礼(「パンを裂く」「主の晚餐」)  
=典礼行為全体としてのエウカリスティア=「感謝の祭儀」「感謝の典礼」
- \*パンとぶどう酒の杯の上に唱えられる神への感謝の祈り  
=エウカリスティアの祈り → 「奉献文」(奉献の祈り)
- \*被造物であるパンとぶどう酒に感謝の祈りが唱えられて成ったキリストの体と血  
=エウカリスティア(聖体)

その後の典礼のイメージ変化:

「会食儀礼」イメージから「奉献儀礼」イメージへの変化

「食卓」→「祭壇」

「食卓への食べ物・飲み物の準備」→「祭壇への供えものの準備」

「感謝の祈り」が「供えもの、ささげもの、いけにえ」をキーワードとして

「ささげます、受け入れてください」という祈りを主軸として「奉献の祈り」(奉献文)となる

しかし、感謝～奉献のすべては 元来の「トーダー」→「エウカリスティア」に含まれている  
「聖体」を「キリストによる救いの恵みに対する感謝」という大きな文脈の中で理解することが重要

### (3) 教父思想の時代の奉献文の成文化

「エウカリスティアの祈り」からの発展と多様な成文化

4世紀後半～7/8 世紀頃までに確立、各様式固有の諸奉献文が形成・継承

\*東方: アナフォラ anaphora (奉献文)

例: バシレイオスのアナフォラ

→現在の第四奉献文の一資料

\*西方: カノン canon(典文)

例: ローマ典文 Canon Romanus

→現在の第一奉献文の元

### (4) 古典的なローマ・ミサの形成と確立

a) 「ミサ」という名称 (missa/missae)

慣習的に使われていた解散の言葉 Ite missa est.が出所と考えられている。

祭儀全体の名称として 4c.末頃から散見(「エゲリアの巡礼記」)

5 世紀末からより明確に「エウカリスティアの祭儀」の名称として一般化

b) 特徴: 叙唱 (praefatio)と集会祈願により祭儀の主題を多彩に展開する形式

c) 「式次第」ordo missae の全体像の形成 →現在のミサの式次第の基礎

(司教座大聖堂での司教、司祭、助祭、他の奉仕者が多数、会衆の多数参加の典礼前提)

**開祭**: 祭壇への表敬、いつくしみの賛歌、栄光の賛歌、集会祈願

**ことばの典礼**: 答唱詩編、アレルヤ唱 (※旧約朗読、共同祈願の衰退)

**エウカリスティアの典礼(感謝の典礼)**

供え物の準備、叙唱(感謝の賛歌)奉献文、交わりの儀(平和の賛歌、主の祈り)

**閉祭**: 会衆のための祈り、派遣の祝福